

ホワイトヘッドの汎心論

平田 一郎 (Ichiro Hirata)

関西外国語大学短期大学部

近年盛んになってきた汎心論 (panpsychism) を巡る議論において、A.N. ホワイトヘッドのコスモロジーは創発的 (emergent) 汎心論と位置づけられる。実際ホワイトヘッドは世界が「現実的存在」(actual entity) という究極的実在から構成されるという一元論を取りながらも、そういった現実的存在のあるものが創発してより高度な経験を持つ時、それは意識を有するとした。汎心論が意識を持つかどうかということにかかる汎経験論 (panexperientialism) を取る限り、確かに創発によっていると言える。

しかしこのホワイトヘッドの主張をより詳しく見るとそれほど単純でないことがわかる。彼は「経験は意識に先行する」として、経験をより広く取る。実際全ての現実的存在を経験の活動 (act of experience) とするのであり、全ての究極的存在が「経験」を持つという意味での汎経験論なのである。そしてそれらすべての現実的存在はまた物的 (physical) であるとともに心的 (mental) である双極的 (bipolar) 存在であるとされる。ここで心的な側面を担うのは、永遠的客体 (eternal object) を対象とする観念的感受 (conceptual feeling) である。即ち全ての現実的存在は外物からの因果性を担う物的感受 (physical feeling) と共に、そういった物的感受から派生する観念的感受を有するがゆえに心的とされる。ホワイトヘッドの汎心論はむしろこういった二極性による。

ここで観念的感受の対象とされる永遠的客体とは、先ず端的には赤や青といった色などの性質、あるいは現実的存在がそれを担うことで「椅子」になるという「椅子」というパターンなどとされる。いわば性質、あるいは普遍といったものであり、ただしそれ自身としては存在せず常に何らかの現実的存在に担われている限りで存在するのである。そして全ての現実的存在は「経験」の「主体」とされるが、ここでの「主体」は通常言われる意味での主体ではない。即ち主体があってそれが何かを担うというよりは、客体から過程を経て形成される客-主構造 (object-subject structure) によるものであり、その限りでは通常の意味での主体は存在しない。このように考えるとホワイトヘッドの汎心論はむしろ汎性質主義 (panqualitivism) と位置づけられるかもしれない。

しかもホワイトヘッドのコスモロジーの通常解釈においては、現実的存在はあくまでもサブアトムなマイクロな存在であり、それゆえ現実的存在の「経験」はマイクロな経験でしかない。それゆえ現実的存在の心的な側面とは、そこから創発して通常心になるという意味での汎心論、即ち汎原心論 (panprotopsychism) であるし、その点でも汎性質主義の一種であると言えるかもしれない。

しかしながら、ホワイトヘッドのテキストをより精細に見てみると、ウォラックの主張するように、現実的存在をサブアトムなマイクロな存在のみである、とするのは誤りであることがわかる。確かにサブアトムな存在でもあるが、椅子や岩といったマ

クロな存在もまた現実的存在としている。より正確には「岩である」「椅子である」という事象が現実的存在であり、通常の「物」はそういった事象の連なりとしての社会なのである。その限りで電子や原子といったマイクロな物理的存在もホワイトヘッドにとっては社会であり、そういったマイクロな事象とマクロな事象が入れ子状に重なるギブソンの自然観というものが本来のホワイトヘッドのコスモロジーなのである。

しかしこのことと全ての現実的存在が「経験」の活動であるということとを合わせると、マクロな岩や椅子が「経験」を有するという、現代の汎心論者が通常コミットしないような主張が帰結することになる。果たしてこれは可能なのであろうか。通常の間人経験において色や音といった性質を感じることは、そういった色や音のクオリアを持つということになるが、岩や椅子がクオリアを持つということなのであろうか。

この発表ではそういった見方も可能であるということを示したい。そこでポイントとなるのは、時間差論法からくる知覚の対象の過去性であろう。ホワイトヘッドにとっては知覚とは原初的には過去の存在しかその対象にしえない。その上で彼にとって内と外とは現在と過去に転換される。言い換えれば、記憶における過去の対象の想起と外物の知覚とに本質的な違いはない。その上で岩や椅子といった通常心を持たない存在も、事象の連なりという点からは過去からの性質の引継ぎはありうる。それは過去のものの現在への引継ぎである限り、外物の内的対象への転換という点で知覚と同じ構造を持つ。さらにこのことは自然から近代科学が消去した色や音を復活させることにもなる。そういった論点を中心としながら、もう一度彼の人間の意識の創発の議論の位置づけや、その汎心論の意義を考えていきたい。

参考文献

- Brüntrup, G. (2017) “Emergent Panpsychism” in Brüntrup, G. & Jaskolla L. eds. (2017) : 48-71.
- Brüntrup, G. & Jaskolla, L. eds. (2017) *Panpsychism: Contemporary Perspectives*, Oxford University Press.
- Chalmers, D. J. (2017a) “Panpsychism and Panprotopsychism” in Brüntrup, G. & Jaskolla L. eds. (2017) : 19-47.
- (2017b) “The Combination Problem for Panpsychism” in Brüntrup, G. & Jaskolla L. eds. (2017) : 179-214. 山口尚抄訳『現代思想』(Vol. 48-8) 27-54 頁。
- Coleman, S. (2014) “The Real Combination Problem: Panpsychism, Micro-Subjects, and Emergence,” *Erkenntnis*, 79.1: 19-44.
- Wallack, F.B. (1980) *The Epochal Nature of Process in Whitehead's Metaphysics*, State University of New York Press.
- Whitehead, A.N. (1925/1967) *Science and the Modern World*, New York: The Free Press. 上田泰治他(訳)、『科学と近代世界』[ホワイトヘッド著作集第六卷]1981, 松籟社。
- (1929/1978) *Process and Reality, Corrected edition*, New York: The Free Press. 平林康之(訳)、『過程と実在』1,1981, 2,1983, みすず書房。
- 『現代思想 特集 | 汎心論—21世紀の心の哲学』、2020年4月号 (Vol. 48-8) 青土社。